

## 質疑応答

**藤内哲也**———それではまず、午前中の講演について寄せられました質問のなかから、いくつかご紹介したいと思います。まず、最初の質問ですが、一番最初に講演していただきました、ブルターニュのタンギ・ルアルン氏に対しまして、「少数言語の継承教育に興味があります。具体的にディワンのブルターニュ語学校では、二言語教育がどのように行われているのか。それは、一つの授業のなかで併用されているのか。また、理系の科目、数学、算数でありますとか、理科もブルターニュ語でなされているのか」、という点についてご質問が出ております。

**タンギ・ルアルン**———ディワン学校でのプログラムは、フランスの公教育で課されているプログラムとまったく同じです。特に小学校の課程では、ブルターニュ〔ブレイス、ブルトン〕語を学ぶことを主体に、ブルターニュ語で授業が行われています。その目的は、家庭でフランス語を使用している生徒、家庭でブルターニュ語を使用する生徒、双方が、フランスで行われている公教育のレベルと同じレベルに達することにあります。その意味で、ブルターニュ語が、たいへん重要なポイントとして、授業に組み込まれています。

ディワン学校では基本的に、すべての授業は、ブルターニュ語で行われております。子どもたちにとっては、特に、このブルターニュ語、フランス語の区別というのは、たいした困難をとまなうものではなく、たとえば、読み書きは、ブルターニュ語で習います。あるいは、算数、理科などをブルターニュ語で習います。もちろんフランス語の授業もあります。まずは、ブルターニュ語を習ってから、フランス語の習得にかかるというシステムなのです。子どもにとっては、ブルターニュ語とフランス語を併用しても、簡単にスイッチの切り替えができるようで、慣れるとまったく困難をとまなわずに、自らすすんで、「あ、フランス語ではこうなんだ

な」、というふうに自発的に学んでいる、という状況です。

藤内———ありがとうございました。つづけて、「ディワンでは政府の公的な助成金が出ているのかどうか」というご質問が出ております。

ルアルン———助成金の獲得については、非常に長い歴史的経緯がございます。発足当初は、政府からの助成金をまったく受けることができませんでした。ですので、学校としては生徒から授業料を徴収する、あるいはチケットを売る、さまざまなフェスティバルを催すなどして、資金を集めました。今朝、写真でご覧いただきました、さまざまな歌い手、ミュージシャンら、プロのアーティストたちがコンサートを催して、その売上金を学校に寄付するなどして、学校の運営が行われておりました。それから4、5年たってようやく、さまざまな運動が軌道に乗り、助成金を獲得する、という経緯にいたったのです。

ここにお集まりの皆様方の中にわたしの妻とその友人がおりまして、二人ともディワンの教育に深くかかわっております。そのことをひとこと申し上げておきます。さて、発足から17年たち、ようやく1995年に、はじめてディワン学校が、他の少数言語の家族たちで運営されている、少数言語教育の学校と同じように、国と一種の契約をかわしまして、正式な援助を受けることができるという決まりがなされました。それに尽力したのは、教育省のフランソワ・バイルーという教育大臣です。大臣自身、オクシタン語、南フランス語という特殊な少数言語が話されているプロヴァンス地域出身で、ディワンのためにいろいろと尽力していただきました。とはいえ、援助の獲得は簡単ではなく、さまざまな困難を乗り越えざるを得なかったという経緯がございます。

質問の最後の部分について、これからお答えいたします。具体的には、国からの援助を受けるために、国と各学校が契約を交わし、その国との契約により、教員の給料が国から支払われます。ただし、これには条件がありまして、新設の学校では設立から、5年たたないと国との契約を交わすことが出来ませんので、立ち上げてから最初の5年間は、校舎の建設、あるいは教員の給料などを、どうにか自助努力で賄わなければなりません。それについては、地方自治体からの援助が出ていますが、それにもやはり上限があるし、またさまざまな国の規制や法律がありますので、地方自治体がたくさん援助をしたいと思っても、なかなか出来ないというのが現状でございます。

藤内———ありがとうございました。それではつづいてメイリオン・ブリス・ジョーンズさんに質問がきております。「アイステッツヴォッドは具体的にどんな

ことをしますか。詩人は競争するのか、ようするに、コンクールなのかどうか」という質問です。

メイリオン・プリス・ジョーンズ——まず、期間は8日間。プログラムは、毎日毎日、いろいろな催しがたくさんあります。それから、コンペティションによってはエントリーする前の選考というのがあったりしますが、アイステッズヴォッドについてはありません。ストラクチャー、どういう構造か、というのは、非常にいいご質問で（通訳：というのは、たぶん答えるのが難しいという意味ではないかと思うのですけれども）、基本的にはさまざまな競技が毎日行われているということです。最初に行われるのが、音楽のコンクールで、これはジャンルや年齢によっていろいろあります。たとえば合唱、バンドの演奏、それから詩の朗唱というのがあります。たとえば6歳の子どもたちによる詩の朗唱ですとか、あるいは讃美歌を歌うといったこともあります。

中心となるのは詩のコンクールです。ひとつは自由詩、定型のない詩ですね、これは月曜日に行われます。この詩や文学に関するコンペティションは、アイステッズヴォッドの場合、一番大きなパビリオン、3,500人くらいを収容できるようなパビリオンで行われます。まっ暗な中に、聴衆全員が立っている、そこで優勝者の名前——この名前はペンネームなんですね——それが読み上げられる。そしてトランペットが吹き鳴らされるというような、非常に厳かな儀式的なかで行われます。それからもう一つ、ウェールズの典型的な定型詩、伝統的な定型詩によるコンペティションもあります。どういう定型なのか、ご説明するのは非常に難しいです。それから散文のコンペティションもありますけど、こういったものが日を替えて行われています。

だれがアイステッズヴォッドを始めたのかはともかくとして、その始めた人はウェールズの天気のことをあまりわかっていなかったようです。というのは、アイステッズヴォッドでは、通常、非常に広範なイベントが、野外で、大きな広場で行われます。どのくらいの規模かを説明しますと、そうですね、中央のメイン・パビリオンにはまったく行かない人々が大量います。コンクール以外の多くの催し、社交的な集まりやイベントが、実はメイン・パビリオンの回りの数々のパビリオンで行われているのです。日常生活のあらゆる部分、科学からスポーツまで、ウェールズ語を媒介にして営まれるウェールズ人の生活のすべての局面にかかわっていることが、そこで行われているのです。それらは、いろいろな意味において、詩や合唱などより、はるかに大きなイベントだと言うことができます。なぜならば、ウェー



ルズ語は政治的アイデンティティを持っていません。アイステッツヴォッドこそが政治的なアイデンティティなのです。

**森野聡子**（通訳）———メイリオンさんはおっしゃらなかったのですが、私も何回かアイステッツヴォッドに行っていますけれども、雨がよく降るんですね。そうするともう泥んこになって、車なども大変になるんです。それから、先ほど詩とか文学の話はしましたが、そういうパビリオンの中で行われているコンクール以外に、パビリオンの外でさまざまな社交的な集まり、小さな集会が行われているんですね。ですから、天気が悪かったりすると結構大変なことになります。

**藤内**———ありがとうございました。

それでは、ダヴィス・ヒックスさんに質問が来ておりますが、英語で質問が来ておりますので、コード先生に読んでいただきましょう。

**スティーブ・コード**（鹿児島大学法文学部）———「ヒックスさんの話では、文化は経済を活性化させてきたということですが、コーンウォールには産業や自然資源はありますか」という質問です。

**ダヴィス・ヒックス**———コーンウォールの産業にはスズ鉱業や陶土産業があります。スズ鉱業はフェニキア人の昔から続いていて、「魚とスズと銅」という昔からのコーンウォール名産品は、いわばコーンウォールの過去を代表する特産品です。そういうわけで鉱業に関する専門技術があるわけです。世界中の坑道にはどこにでもコーンウォール人の男女がいると言われていたほどです。コーンウォール人は大規模な海外移住をしていて、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アメリカ、メキシコ、アルゼンチンなど世界各国に散らばっています。アルゼンチンのエンパナーダ〔ミートパイのような具入りのパン〕はコーンウォールのパステイ〔元来は鉱夫の軽食〕が起源だとも言われていますが、多分本当でしょう。

ほかに産業としては、農業、漁業、観光業があります。今日の話にもあったように、観光業においてはコーンウォール人自身が主導権を握るようになってきており、外部者が期待するものではなく、コーンウォールの人々に関係するものにしようという動きがあります。

**藤内**———どうもありがとうございました。

それでは会場の皆様から午後に講演をいただきましたお二人の方あるいは午前中の方も含めまして、すべての人に聞いてみたいとかですね、どのようなご質問でも構いません。せっかくの機会ですからぜひこの場で質問したいという方は挙手をしていただければと思います。どなたからでも結構です。

原証明（東北学院大学）——きょう、わざわざこのために遠くからまいりましたので、ぜひ質問をさせていただきたいと思います。地理的な位置から考えますと日本も実はユーラシア大陸の辺境、極東であります。これまで日本では少数言語であるがゆえに中心に向かって文化事業を訴えた、そういう活動が全くなかったとは言えませんでした。

きょう皆さん方がお話しされたことにはとても興味を感じましたけれども、しかしながら私が質問をいたしたいのは、「地域活性化」をより具体的に、あるいはさらに展開していく場合、将来に向かって全く問題が出ないのだろうか、という点についてでございます。このことに関しては最後にアイルランドについてお話しされたニヒネーデさんが少し触れたかもしれませんが、結局言語文化や芸術を通じた、地域の活性化というのも結果的にはそこに人間をたくさん呼び込むことになります。特に都会、あるいはすでに発展したところから多くの人間を呼び込むことになります。そのことが結局は地域の日常的な生活のあり方に大きな変化をもたらしたり、はたまたこれまでのあり方を大きく変えてしまい、実はこんなはずではなかった、などという形で新たな問題を生じさせてしまうようなことがないのだろうかとは私は考えているわけであります。

どなたからでも結構ですので、お答えいただければありがたいと思います。

藤内——繰り返しますと、地域の活性化がその地域の文化を変えてしまう危険性はないのか、そういう逆効果といいますか、生活のあり方を変えてしまう可能性はないのかというご質問であろうと思います。どなたでも結構ですということですが、何かご意見ある方からということになるかと思いますが。

ルアルン——一時期、やはり私どもの地域、ブルターニュでも、観光産業が人々の生活のあり方を変えてしまうのではないかという懸念がありました。

しかし、いま現在、こうした心配はもはや過去のものになっています。と言いますのも、いずれにせよ人々の生活は変わりゆくものですし、今の時代は、これまでの生活のあり方と比べて新しいフェーズに入っていると、だれもが感じていると思います。

そして、ブルターニュの文化あるいはブルターニュの言語を非常に魅力的だと思ってくださるのは、特に、しばしば外国の方なのです。外国から来た方が、ブルターニュの文化、言語に触れて、非常に魅力を感じてくださっている。これもまた、現実のことです。

もう一つ、懸念材料が現在あるとしたら、それは文化助成金の用途です。文化に

対して国が交付する助成金というのは2種類ありまして、1つはオリジナルの文化に対して与えられる助成金、もう1つがさまざまな形で普及される文化に対する助成金でございます。私ども地域ブルターニュの諸機関は、どこの国のどこの地域もそうであるように、国の予算に依存しております。

つまり、国からの助成金によって文化関連の費用が賄われる部分というのが大きいのですが、その助成金与えられる傾向は、後者のほう、つまり再生産文化の普及のために使われることが非常に大きいわけです。

それに対する私たちの希望は、人々が自分自身でつくる、新しいクリエイションに対して何らかの財政的な援助をしてもらえないかということなのです。普及品をただもらう、受けとる、受け手になるのではなくて、新しい、クリエイティブな文化の創造のためにもっと財政的な援助を受けられないか、ということを考えております。

藤内———どうもありがとうございます。ほかの講演者の方。

ブリス・ジョーンズ———文化の未来にとって一番脅威となるのはツーリズム、観光ではないのではないかと考えます。それよりも、未来というものがどういう形で変化していくのかということではないでしょうか。特にウェールズの場合には若者たちがウェールズを去ってしまつて、大都市などに移住してしまい、そのかわりにウェールズ語が話せない人たちが流入してくるという、そちらの方が深刻であり、観光に関しては問題ではありません。

ロバート・ダンバー———スコットランド全体のことでなく、ゲール語について話を限定してお話しをします。

こちらの黒い青で示したところがゲール語が強く話されているところです。これらの地域はほかのところから地理的にも離れているものですから、そのことによってゲール語が守られているということにもなります。交通網が発達したことからこれらの地域はもはや離れた、隔離されたところではなくなっていました。このことによって外からこのゲール語で話されている共同体の中に入っていくことも可能になり、また、メイリオンさんのお話にもあったように、若い人たちがその大都市の生活などにあこがれて外に出ていくということも可能になりました。

これらの地域というのは、産業というのは主に漁業だったり、農業というものに依存している地域で、これらの産業というのは今弱くなっているものですから、非常に経済的に弱い地域でもあります。この50年の間、政府のほうからスコットランドの北部の地域に大変な資金を出して、これらの地域の産業を活性化させようと



いう動きがありました。

ここでその資本をもとにしてつくられる仕事というのが問題になってきて、それはいわゆるゲール語を伴わない仕事であることが結構多い。そして、特にその仕事を統括する人間というのは資本を持っていて、また技術を持っていて、それらのものというのはもともと英語の話されているところで身につけられたもので、つまり英語話者がこういった地域に入ってくるというわけです。こういった地域に資本を投じ、そして雇用をふやすということは大事な問題ではあるのですが、大事なことはそれらがその地域に根差した資源を使ってその職業というものを生んでいくこと。特にそのゲール語を使用できるような環境、つまりその経済とその文化というものが共存できるようなその雇用を生んでいくことが大事です。

藤内———どうもありがとうございます。

ネッサ・ニヒネーデ———従来アイルランドにやってきた会社、アイルランドに設立された会社はアイルランドの社会の事情を知ることがなかったわけです。余りよく知らずに入ってきた、あるいは観光客もそうでしたけれども、近年はアイルランドの事情がわかってくるにつれて、そのアイルランド語の持つ魅力とか、そういうものに対して大きな興味を持っている。それが今日、私がお話しした事例の一つだと思います。そして、この新しい試み、地域社会で人々がイニシアチブをとってやったこと、これが今後のアイルランドに夢を投げかけているものではないかと思えます。

藤内———どうもありがとうございます。

それでは、ほかに質問がおありの方もいらっしゃると思いますけど、ちょっと時間が押しておりますので、また最後に、パネル・ディスカッションの後にでも時間がとれましたらまたご質問いただきたいというふうに考えております。

それでは、ここで第1部をお開きとさせていただきたいと思います。

最後に5人の講演者の皆様、それから通訳の方々に大きな拍手をお願いいたします。

では、少し休みをとりまして、3時25分から第2部を始めたいというふうに思います。5分ほど休憩させていただきます。